慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本博物学史覚え書XIV
Sub Title	Notes on natural history in Japan （ XIV ）
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of the natural science). No.44 (2008.) ,p.99- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	創立150年記念号 : 自然科学のエッセンス = 150th anniversary number : essence of natural sciences 研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20080930-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Hiyoshi Review of Natural Science
Keio University No. 44, 99-124（2008）

日本博物学史覚え書　XIV

磯　野　直　秀

Notes on Natural History in Japan（XIV）

Naohide Isono

1　はじめに

私はいま室町時代・江戸時代の博物誌を調べているが，もし慶應義塾大学で教えていなかったら，研究分野はよほど違ったものになっていたに違いない。

転機が訪れたのは，1989年４月20日だった。この日，所属する経済学部の定例学部会議があるので，日吉から三田へ足を運んだが，着いてみると定刻までまだ間がある。ちょうど調べたい資料があったので，慶應義塾図書館に向かった。そのようなとき，いつもなら目指す場所に直行するのだが，その日にかぎり図書館に入ってすぐの所で，何気なく展示ケースに目を向けた。すると派手な色彩のインコやキジの類，大きなゾウの姿などが目に飛び込んできた。驚いて解説を見ると，『唐蘭船持渡鳥獣之図』という江戸時代の図譜。新学期のこの時期，図書館では学生の目を引く本や写真を展示するのが恒例で，その年の「出し物」にたまたまこの資料が選ばれていたのだった。

展示期間が過ぎるのを待って調べてみると，これは江戸時代に長崎に渡来した鳥獣の彩色図譜で，長崎代官高木家が幕府に送った「御用伺絵」(注１）の同家控図集――博物誌の世界では，内容はもちろん，書名さえ知られていない超一級資料であった（注２）。

1980年頃から，私は日本の博物誌の歴史を調べはじめていた。だが，その頃は明治以降の動物学の発展がテーマで，江戸時代に手をつけるつもりは全く無かった。それが，慶應義塾図書館での偶然の出会いで，大きく方向を転じたのであった。塾で教鞭を取っていなければ『唐蘭船持渡鳥獣之図』とも対面せず，江戸時代にも無縁だったかもしれない。

〒232-0066　横浜市南区六ツ川 3-76-3-D210，慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.）［Received Mar. 25, 2008］

本稿では，引用文の漢字と仮名に現行字体を用い，濁点・句読点・振仮名を適宜加えた。引用文中の（　）は原注，〈　〉は原本の振仮名，漢字上の振仮名は磯野が加えたもの，【　】は脱字・送り仮名の補足，［　］は磯野による注あるいは補足である。仮名が続くとき，単語に下線を付して読みやすくした場合もある。

江戸時代を調べはじめてからも，三田の慶應義塾図書館に多大な恩恵を蒙った。同館には，多くの方々が寄贈された江戸時代の和書・漢書が夥しく所蔵されている。そもそも『唐蘭船持渡鳥獣之図』は，電力王と呼ばれた松永安左衛門氏（1899年，塾中退）が入手・愛蔵され，やがて1957年に塾へ寄贈されたものである。

慶應義塾図書館の博物誌資料の数は決して多くはないし，『唐蘭船持渡鳥獣之図』に匹敵する貴重な資料は他にないが，江戸時代の博物誌に最大の影響を与えた『本草綱目』をはじめ，多数の漢書を含む基本資料や関連資料はかなり揃っている。それを自由に手にとれるのでどんなに助かったことか。

また，明治〜昭和前半期の出版物も豊富で，明治前期の「博物局博物舘」（現東京国立博物館の前身）の『博物舘列品目録，天産部動物類』という稀書，幕末期から明治前期に活躍した博物家伊藤圭介の80歳の祝に刊行された『錦窠翁耋筵誌』，米寿の折の『錦窠翁米賀会誌』，『東京書籍館書目』（明治９年）や『東京図書館和漢書分類目録』（明治19年）などの古い図書目録類等々，有用な資料が所蔵されている。時代を下ると，日本で博物誌の歴史を初めて研究した白井光太郎の論文集『本草学論攷』，上記『本草綱目』の和訳『［新註校定］国訳本草綱目』，などを利用できたのは有難かった。江戸時代博物誌の歴史を調べる上で欠かせない藩史・県史・市史・町史の類も少なくない（注３）。

慶應義塾図書館を通して，150年に及ぶ塾の歴史の重みを私は実感している。また，昔の塾から巣立った文系の方々が，自然科学方面にも目配りを忘れぬ幅広さを持たれていたことに強い印象を受けている。

さらに，『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』という報文発表の場に恵まれたことが，大きな幸いだった。同誌創刊時（1985年）の取り決めで，広い意味での「自然科学」誌とされ，博物誌の歴史なども掲載できることになり，今日に至っている。いま博物誌の歴史を探っている人々の大きな悩みは，発表の場が乏しいことだが，幸いにも私にはその場が与えられていた。

この日吉紀要には数々の報文を掲載してきたが，「日本博物学史覚え書」のシリーズを出し始めたのは1993年だった。いろいろな資料を調べていると，報告として発表しておきたいが，１件が１〜数頁の短報にしかならない場合も多い。それを個々に独立した報文とするのは気が引ける，いっそ数件をまとめたらと考えてのことだった。それから時折このシリーズを執筆し，今回を含めて14回128項を数えるにいたった。

振り返ると，私が江戸時代に踏み込んでからほぼ20年。そのこともあって，今回の「日本博物学史覚え書　XIV」では，この「はじめに」で塾と私の江戸博物誌研究の関わりを記すとともに，江戸時代の著作について調べるあいだに得た注意点のいくつかを，最終節「江戸博物誌を調べる」に述べておきたい。

（注１）珍禽異獣が長崎に到来すると，代官高木家は御用絵師に精密な絵を描かせて幕府に送り，御用の有無を伺った。「御用」となれば，役人を添えてその鳥獣を江戸に送り，「不要」ならば民間にまわすなどの処置をとる。その絵を私は「御用伺絵」と呼んでい

る。

（注２）磯野直秀・内田康夫，『唐蘭船持渡鳥獣之図』の研究，慶應義塾大学日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション，７号，1990年。／磯野直秀・内田康夫，『舶来鳥獣図誌：唐蘭船持渡鳥獣之図と外国産鳥之図』，八坂書房，1992年。

（注３）江戸時代から昭和前期までの資料を通覧するには『慶應義塾図書館和漢図書分類目録』が良い。ある書名の資料を探すには OPAC が便利だが，どんな本があるかを調べるには印刷された目録に勝るものはないし，カード目録も捨てがたい。

２　『万香園裡花壇綱目』

富山藩主前田利保（注１）は幕末期の博物大名で，幕臣などと動植物の研究グループ「赭鞭（しゃべん）会」を作ったことはよく知られており，また数多くの博物書を残した。

利保の著作のなかであまり知られていないものに，『万香園裡（ぼんこうえんり）花壇綱目』がある。これは，利保が江戸池之端の藩邸（注２）内の万香園と富山城内の草木園に植えていた草木の由来や形状を記したものだが，原本は所在不明であるし，転写本も国会図書館と雑花園文庫にしか所蔵されていない（注３）。

その項目は『本草綱目』にほぼ従って，「甘草」「黄耆」「人参」‥‥の順に，山草部から芳草部の中程（注４）までを配列し，『本草綱目』の各見出しごとに，それに相当ないし関連すると利保が考えた品々が列記されている。たとえば，甘草は４品・黄耆は66品・人参は21品が挙げられている。

現存する『万香園裡花壇綱目』は５巻で，巻ごとの構成は次のとおりである。

第一巻：山草部，甘草～萎蕤
第二巻：山草部，知母～貫衆
第三巻：山草部，苦参～及己
第四巻：山草部，鬼督郵～金糸草
第五巻：芳草部，当帰～莎草

この構成を見ると，第二巻と第三巻の間に本来は巴戟天から升麻に至る20数項があるべきなのに，国会図書館本にも雑花園本にも全く欠けている。しかし，この部分を執筆しなかったとは考えにくいので，転写本の作成以前に失われたに違いないが，逸失した部分が出現する見込みは薄いとあきらめていた。

ところが，その逸失部が意外な個所で見付かった。伊藤圭介・伊藤篤太郎編『植物図説雑纂』（国会図書館，別６―９，254冊：以下，『雑纂』と略）を調べているおり，失われたと思っていた部分の切抜きが方々に貼り付けられていることに気付いたのである。それが本来『万香園裡花壇綱目』の一部であることは，切抜きごとに圭介が「万香園花壇綱目」（「裡」の字がつねに無い）と出所を記しているし，記載様式が上記の５巻のそれと共通していることからも，間違いない。このことはすでに報告している（注５）が，改めて紹介しておきたい。

これまで探し出した記述は表１（注６）のとおりで，欠落している「巴戟天～升麻」26項目

表１　『万香園裡花壇綱目』「山草部・巴戟天～升麻」の復元

括弧の前は品番号，括弧内は『雑纂』の冊番号：たとえば，巴戟天の８～９（冊155）は，『雑纂』冊155に巴戟天の品目８～９があることを意味する。*は番号の重複，？は品番号の記載無し

漢名	品番号（『雑纂』冊番号）
巴戟天	１～７（別11-33本・冊３），８～９（冊155），10（冊109），？三蔓草・？鶏尾蘭（冊72）
遠志	？仙台ハギ（冊245）
百脈根	１～６（冊172）
淫羊霍	１～30・付記（冊11）
仙茅	１～３（冊200），？桔梗ラン（冊208）
玄参	１～10（冊167）
地楡	１～12（冊60），？ヲランダヂユ（冊237）
丹参	１～27・付記（冊187）
紫参	１～３・３*・４・４*（冊12），５～６（冊21），７（冊175）
王孫	１～11，15～16（冊88），17～18（冊172）：下注参照
紫草	１（冊119），４（冊39），５（冊51）
白頭翁	１～25・付記（冊223）
白及	１～７（冊218），10（冊134），？二葉ラン・？頼蘭（冊80）
三七	１～３（冊195）
黄連	１～30・30*～34・付記（冊61）
胡黄連	１？胡黄連（冊138），２（冊82），３～５（冊97）
黄芩	１～２（冊62），３～12（冊91）
秦艽	１～７（冊233），８～15（冊100）
柴胡	１～３（冊193），４～６（冊39），７（冊164），？北柴胡（冊245）
前胡	１～６（冊245），７～10（冊193），11（冊80），12・付記（冊245）
防風	１（冊32），２～４前半（冊18），４後半～５（冊229），６～７（冊22）
独活	１・１*・２～４（冊123）　独活から都管草までは，『雑纂』冊123中に連続
羌活	１～３（冊123）
土当帰	１（冊123）
都管草	１（冊123）
升麻	１～32・付記（冊231），34～35（冊51），35*（冊132），36（冊229），37～48・48*・49・49*～51（冊64）
所属不明	？大車草（冊208）：いずれかの記文の後半か？

（注）原本は11の注を誤って独立項12～14とするので，この部分を除いた。

の計325品（付記は除く）の記述を復元できた。もっとも，遠志は１品だけだし，紫草の品番号２～３が欠けているなど，未発見の個所がまだ残っている（注７）。

＊　＊　＊

本稿では，『万香園裡花壇綱目』の記述の興味深い個所も紹介しておきたい。

各品については，まず「品番号・類名（漢名）・葉形・産地・和名」を見出しとして挙げる。たとえば，「白頭翁」の第１品は「一・白頭翁・防風葉・武江・オキナグサ」が見出しであり，「一」は品番号，ついで「ボウフウに似た葉をもち，江戸産で，和名はオキナグサ」の意味。利保は見分け方として葉の形を重視していたらしいので，名の次に葉の形を記すのである。ついで記文があり，産地や来歴・形状の詳細，関連する事柄を述べる。興味深いのは来歴や関連記事で，以下に数例を挙げておく。●の後は「巻次，項目名―品番号」，次行が見出し，その下が記文の引用。『植物図説雑纂』から今回復元した部分は「復元巻」と記す。また，♣で示したのは磯野による解説・注記である。

●巻１，甘草―１

「甘草，福州種　甲州出　寒泉園　アマキ

此種，福州ヨリ舶来セシヲ甲斐国ニ栽植シタリ。其伝来ハ武田信玄，唐ヨリ，トリ寄セタリト云。其種ヲ近来田丸寒泉園ニ移シツルヲ，今池之端万香亭園中ニ培養ス‥‥」

♣この系統は，享保５年（1720）吉宗の派遣した丹羽（にわ）正伯らの採薬使が，同年８月17日に甲州於曽（おそ）村（現塩山市）の高野伊兵衛家で発見した。文中に名がある田丸寒泉は幕臣で，赭鞭会メンバーの一人。本書の方々に名前が出るし，国会図書館本はその旧蔵書（注３参照）なので，利保はとりわけ親しかったらしい。

●巻１，甘草―４

「同［甘草］南京種　尾州出　直根

此種，近年武江［武州江戸］ニ絶タリ。然ニ天保十三年［1842］冬，武江板橋住ノ花戸長太郎尾張ヨリ持帰ル。同十四年春，万香園ニ植フ。‥‥」

♣長太郎は当時名高かった花戸の内山長太郎。記事には花戸のほか，いろいろな人物の名前が出て，利保の交流関係がわかる。

●巻１，黄耆―28

「同［鶴頂草］　朝鮮ハギ　武州江戸

「此種，花戸ノ称ナリ。一奇品アレバ朝鮮或ハ琉球ト名付ル，是花戸ノ恃頑〈ヲホチヤク〉ナリ。其贋名ニ少シノ定アリ。朝鮮ト名（ナヅ）クル者，多ハ矮生ノコト也。漢土ニ石ト云テ矮小ノ意トナルト同一ナリ。是亦知ラズンバ，流俗ニ疎ンゼラレン‥‥」

♣これに続く品29「蝦夷ハギ」では，「此種，亦花戸ノ一称，必ズ蝦夷ノ者トスルニ非ズ」と記す。このように，名称についての記事もかなり見られる。なお，恃頑〈ヲホチヤク〉は「横着」の漢語らしいが，利保は一般の通用語を用いずに見慣れない漢語をわざわざ持ち出す悪癖があったようだ。「等」や「件」を「シナ」（＝品），「来」を「バカリ」，「仇」を「タ

グヒ」（＝類）と読ませたり，植木屋も一般的な「花戸」「種樹家」のほかに，「栽種戸〈ウヱキヤ〉，種樹工〈ウヱキヤ〉，花行〈ウヱキヤ〉，果子行〈ウヱキミセ〉，花工〈ハナヤ〉，花行〈ハナヤ〉‥‥」などを，振仮名付で乱発している。

●復元巻，地楡―1

「地楡　楡葉尋常　和地楡

此種，武州江戸売家［花戸］ニアリ‥‥和俗ワレモカウトイヒ‥‥団子イタヾキトモ云」

♣ワレモコウは花戸の売品だった。本書によると，シャジクソウ（巻1―黄耆）や，ハマウツボ，ナンバンギセル（2品とも冊2―肉蓯蓉），オニノヤガラ（冊2―赤箭天麻）なども花戸で売っていた。

●復元巻，紫参―7

濠州紫参牡丹葉　天竺牡丹

此種，両三年以前，蘭人持渡ル由ニテ，武江ニ来ル。‥‥蓋シ日本未曾有ノ奇品ナリ。因テ今，赭鞭家［本草家］挙（コゾリ）テ漢名ヲ探ル。的当ノ者ナシ。八種画譜【ノ】纏枝（テンシ）牡丹ヲ以テ，コレニ充テ，先ヅ其名トス。又，花戸，纏枝牡丹ヲ謬伝シテ天竺牡丹ト云。‥‥蓋（ケダシ），八種画譜ノ纏枝牡丹ハ八重ノヒルガホ［昼顔］ニシテ，コノ者ト異ルナリ。全ク，附会シテ号（ナヅケ）ル者ナリ。故ニ此草ハ，花戸ニテ誤リ称スル天竺牡丹トシテ通名トスル方，宜カルベシ」

♣現在のダリアが渡来したのは天保12年（1841）頃で，初期には確かに「纏枝牡丹」「天竺牡丹」と言われ，天竺牡丹の名は後々まで使われていた。その漢字名の由来を明らかにした記事。

（注1）前田利保（1800～59）は越中富山藩第10代藩主，本姓は菅原，長門守，名は利保，字伯衡，号万香亭・自知春館・恋花亭・弁物舎など。

（注2）富山藩の上屋敷と中屋敷はともに池之端（現台東区池之端，不忍池の付近）にあった。

（注3）国会図書館本は赭鞭会の一員だった寒泉田丸六蔵旧蔵で，のち松本確堂が所持していた資料，雑花園文庫本はホーレイ（宝鈴）旧蔵書。注7も参照。

（注4）利保の最大の欠点は大半の著作が未完成に終わっていることであり，本資料に限らず，山草あるいは芳草あたりで中絶しているものが多い。どうも，少々ならず「移り気」的な性格だったように思える。身分を越えた赭鞭会を組織し，定義の重要性を指摘したり，魚類について独自の形態的分類を試みたりと，当時の他の博物家には見られない側面をもっていた人物だけに，惜しまれる。

（注5）磯野直秀，伊藤圭介編著『植物図説雑纂』について，参考書誌研究，59号，2003年：該当頁，16～19頁。なお，同報文16頁下から3行目の「湿草類」は「芳草類」と訂正。

（注6）注5報文で見落としていた原本品番号の欠落や誤りを修正，また柴胡・前胡の編成を変更した。

（注7）伊藤圭介の日記の明治8年8月11日頃に，『万香園裡花壇綱目』（原本？）はすでに焼失したこと，同11月28日・30日頃に同書転写本山草部の一部を借り，その転写を依頼

したことが記されている（『伊藤圭介日記』10号，圭介文書研究会編，名古屋市東山植物園，2004年）。その転写稿が切り抜かれて，『雑纂』に貼付されたに違いない。なお『雑纂』には，現存巻１～５の転写，あるいは切抜き貼付はまったく無い。

3　博物誌資料としての『松平大和守日記』

この資料は，結城（ゆうき）秀康の孫で，徳川家康の曾孫にあたる越後村上藩主のち姫路藩主松平直矩（なおのり）（1642～95）の日記である。前々から芸能関係資料として知られていたが，鷹狩や霞網猟，飼鳥，園芸に関する記事も多く，有用な博物誌資料である。残念なことに原本は戦災で失われ，転写本が残るだけで，それも能・狂言中心の抄録が多い。そのため，原本の姿を伝えると思われる万治２～３年（1659～60）と寛文２～７年（1662～67）だけを，翻刻本（注１）によって調べた。この期間は，大半が直矩の村上藩主時代で，寛文７年後半だけが姫路藩主時代である。

以下に，注目される記述を，年次順に記す。「要約」と振仮名以外は原文のままで，地名を別記しない場合は江戸での記述である。［　］は磯野の注。

●万治２年（1659）５月29日：長崎屋［オランダ品取扱店］所より，はなしがいゐんこ壱羽もとむる。すだ町［須田町］鳥屋より，白頭鳥［シロガシラ？］，とりよせ見る。

●寛文２年（1662）４月19日：小鳥屋より白いんこ［オウム？］壱，替黒鶫［変わりクロツグミ］壱，取寄見る。

●寛文２年（1662）５月３日：公方様［将軍家綱］，角田川［隅田川］辺へ御鷹狩‥‥惣御物数三十六（‥‥河烏七）。

●寛文４年（1664）１月12日（要約）：村上で山狩。カモシカ（青鹿（あおしし））３を生捕，９を仕留める。

●寛文４年（1664）閏５月４日：躑躅・五月（さつき）共ニ百五十色，取寄，植。［ツツジの流行を示す］

●寛文４年（1664）６月29日：唐桐（とうぎり）一本，庵主ニ貰。［ヒギリの初出：庵主は大宗寺の人］

●寛文４年（1664）７月21日：五時花［ゴジカ］・千日草［千日紅］，箱ニ植ル。［本年成の『花壇綱目』稿本の記載（原記載「万日講」）とともに，外来園芸品センニチコウ（千日紅）のもっとも古い記載と思われる。ゴジカは15世紀末以前に渡来：注２］

●寛文５年（1665）４月19日：松平大膳太夫殿より，内々約束ニ付，嶋鵯一来。［シマヒヨドリは室町時代に初渡来したが，江戸時代ではもっとも古い記録か：注３］

●寛文６年（1666）３月１日（於村上）：袖黒鶴，九通（我ハ三見），昨日も六通云々。［ソデグロヅルの名の初出。「通」は通過の意味であろう］

●寛文６年（1666）３月21日（於村上）：おもひよるこころのいとのかたはしも，いはぬ色そふ花の夕はい‥‥これハれんきやうの山ふきいろなるに，つくる。［レンギョウの名の初出］

●寛文６年（1666）３月23日（要約）：越後村上藩領内の瀬波で，マンボウを捕獲，長さ３尺５寸。図あり。「鹿子（シカ）魚ト云‥‥此浦へ上り候ハ初也」と記す。

●寛文７年（1667）２月14日：鳩喚雨（鳥トモ書）壱ツ，鳥屋佐右衛門より求之（代金拾両，藤堂大学殿之鳥と也）。［キュウカンチョウ＝九官鳥の名の初出，渡来は江戸時代初頭］

●寛文７年（1667）閏２月10日（要約）：将軍家綱が高田筋［現高田馬場辺か］で鷹狩，白雁34・真雁23・小鴨10・口鴨［ハシビロガモ］６・黒鴨６などを得る。狩猟記録をみると，一般的に家光時代よりも白雁［ハクガン］が多いが，白鳥は減少している（注４）。

●寛文７年（1667）３月９日：羽州殿より約束ニ付，野鳫［ノガン］一羽来。

●寛文７年（1667）３月15日：伊予屋［オランダ品取扱店］より，風鳥一ツ分‥‥取之。［フウチョウの標本は献上品だけでなく，販売もしていたとわかる］

●寛文７年（1667）３月25日（要約）：横田次郎兵衛邸で白鵰（ハッカン）の卵７つが孵える。松平直矩も１羽を貰って，育てた。

●寛文７年（1667）９月２日～25日（要約）：この期間に姫路近辺で，黒鶴（ナベヅル）８羽・玄鶴（クロヅル）２羽・真鶴（マナヅル）１羽を得ている。

●寛文７年（1667）11月２日（要約）：長崎伊予屋［➡本年３月15日］から，「ホウテン口鳥（くちどり）の頭緒〆二ツ」などを取り寄せる。これはサイチョウ類の嘴（瘤がある奇妙な形をしているので，名高かった）で，店ではこのような物件まで扱っていたのである。

（注１）「松平大和守日記」，『日本庶民文化史料集成』（芸能研究会編），第12巻，三一書房，1977年。

（注２）磯野直秀，明治前園芸植物渡来年表，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，42号，2007年。

（注３）磯野直秀，明治前動物渡来年表，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，41号，2007年。

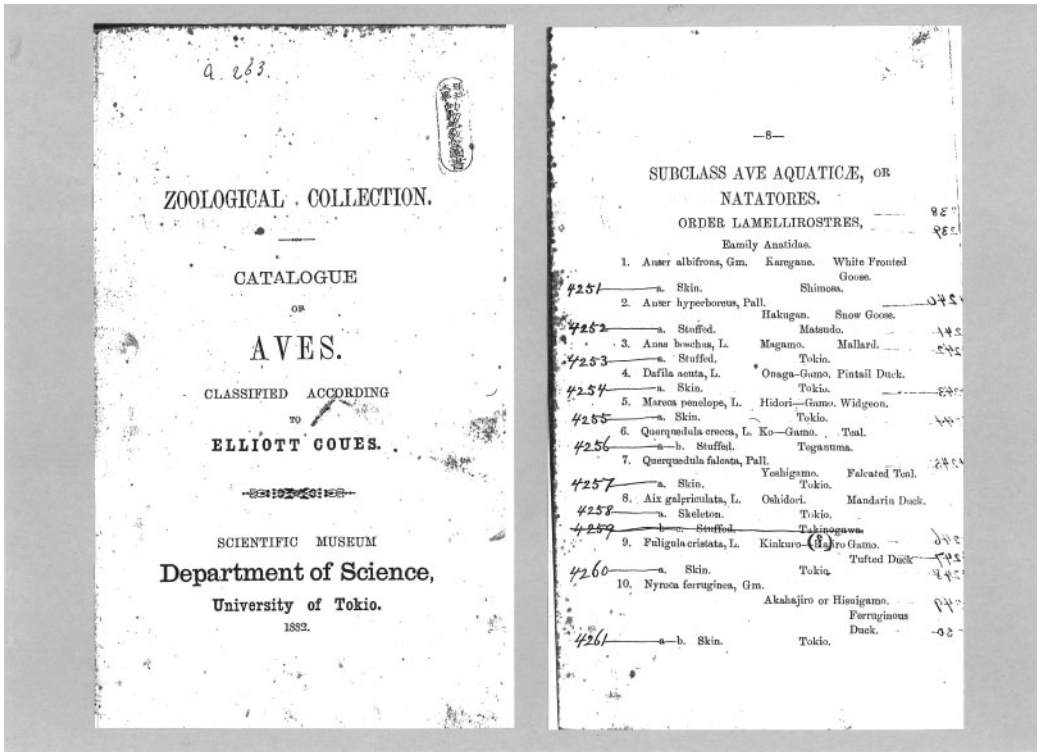
（注４）磯野直秀，日本博物学史覚え書Ⅴ，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，22号，1997年：該当するのは第２節「徳川将軍の鳥猟」。

４　東京大学理学部博物場の動物標本目録

明治10年（1877）に東京大学が創立され，法理文三学部は神田一ツ橋（現学士会館辺）に置かれたが，その創立期の理学部に博物舘があったことは，ほとんど知られていない。これは初代動物学教授モース（Edward S. Morse）が大学に進言して設置された。建物は２階建で，完成は彼が帰米した直後の明治12年９月，最初は「列品室」と呼ばれたが，翌13年３月に「博物場」と改称された。博物場は，金石・地質及古生物・動物・植物・古器物・製造化学標品・土木及機械学模型・採鉱及冶金学模型の８部門から成り，後には日曜に限り一般にも公開した。しかし，その命は短く，明治18年（1885）に理学部が本郷に移転したとき，博物場は姿を消してしまう（注１）。

偶然，この博物場の標本目録に出会ったのは20数年前だった。当時私は，東大理学部動物学教室に残る古資料を探したり整理したりしていたのだが，ある日，同教室の図書室で古い鳥類関係図書を調べていた折，「AVES」と題した１冊の細長い本（登録番号は AVES／11，22.5×13.0cm）があるのに気付いたので，棚から抜き出してパラパラとめくって見ると，これが博物場の目録だった（注２）。本稿では以後『博物場標本目録』と仮称する。

この標本目録は印刷物で，最初の扉（図１左）には「ZOOLOGICAL COLLECTION／



a. 263.

ZOOLOGICAL COLLECTION.

CATALOGUE
OF
AVES.
CLASSIFIED ACCORDING
TO
ELLIOTT COUES.

SCIENTIFIC MUSEUM
Department of Science,
University of Tokio.
1882.

—8—

SUBCLASS AVE AQUATICÆ, OR
NATATORES.
ORDER LAMELLIROSTRES,
Family Anatidae.

1. Anser albifrons, Gm. Karegane. White Fronted Goose.
4251 a. Skin. Shimosa.
2. Anser hyperboreus, Pall. Hakugan. Snow Goose.
4252 a. Stuffed. Matsudo.
3. Anas boschas, L. Magamo. Mallard.
4253 a. Stuffed. Tokio.
4. Dafila acuta, L. Onaga-Gamo. Pintail Duck.
4254 a. Skin. Tokio.
5. Mareca penelope, L. Hidori—Gamo. Widgeon.
4255 a. Skin. Tokio.
6. Querquedula crecca, L. Ko—Gamo. Teal.
4256 a—b. Stuffed. Toganuma.
7. Querquedula falcata, Pall. Yoshigamo. Falcated Teal.
4257 a. Skin. Tokio.
8. Aix galpriculata, L. Oshidori. Mandarin Duck.
4258 a. Skeleton. Tokio.
~~4259 b—c. Stuffed. Takinogawa.~~
9. Fuligula cristata, L. Kinkuro—(Ha)ro Gamo. Tufted Duck.
4260 a. Skin. Tokio.
10. Nyroca ferruginea, Gm. Akahajiro or Hisuigamo. Ferruginous Duck.
4261 a—b. Skin. Tokio.

図１　『博物場標本目録』「鳥綱（AVES）」の扉（左）と本文（右）：リストの左端に通し番号が書込まれている。紙が薄いので，右端には裏の書込みが透けて見える。

CATALOGUE OF AVES ／ ‥‥ ／ SCIENTIFIC MUSEUM ／ Department of Science, University of Tokio ／ 1882」と記されている。だが，それだけではなかった。頁を開いていくと，鳥の部は10頁で終わって，次にまた扉があり，同じスタイルで「AMPHIBIA & REPTILIA」，さらに進むと「PISCES」‥‥とある。結局，扉は計７枚あり，いずれも「1882」（明治15年）の年記が記されている。

各扉の後，リストはみな１頁から始まっている。この様式から考えて，もとは動物群ごとの７点の冊子であり，上記の「扉」が元の表紙と思われる。そして，その７冊を合して１冊としたらしい。そこで，以下，「冊１・冊２‥‥冊７」のように示す（注３）。

その７冊の題名（動物群の名）と頁数などを表２に，それぞれの構成を表３にまとめた。

各冊に載せられた標本は扉に記された研究者の同定，あるいはその著作に基いて分類されているらしい（注４）。個々の標本は，たとえば鳥類（図１右）では，「Anser hyperboreus, Pall. ／ Hakugan ／ Snow Goose ／ Stuffed ／ Matsudo」のように，「学名・和名・英名・標本の様式（この例では剥製＝ Stuffed）・産地」の順に記されている（動物群によっては，和名・英名を記さないなど，多少の違いがある）。

そして，全標本の通し番号らしい数字が，リストの左端に黒インクで書き込まれている（図

１右)。通し番号は，多少の欠番はあるが，以下のように繋がっている（注３）――最初は目録４，つまり軟体動物の１～3446から始まり，目録５～７の節足動物（3524～4183）に続き，次に鳥類（4184～4273），両棲類・爬虫類（4324～4423），魚類（4424～4626，5301～5377）で終わる。ただし，実際には削除や追加があり，判別しがたい事例もあるので正確な数は出せない。表の「標本数」は通し番号の単なる引算であり，あくまで目安と考えてほしい（注５）。

また，この目録には哺乳類，甲虫・鱗翅類以外の昆虫や多足類，現在の環形動物や棘皮動物，腔腸動物，海綿動物などが無いが，元来はその目録もあったのか，未整理で目録が作られていなかったのかは不明である。

さて，注４に記したように，表２に記した６名のうち，目録が作成された明治10年代前半に日本にいて，実際に標本同定に関与したと思われるのは，Lewis と Fenton の２人だけである。

George Lewis（1839～1926：ルイスまたはリューイスと記される）はイギリスの昆虫学者。元治元年（1864）～明治５年（1872）と明治13～14年（1880～81）に日本に滞在し，主に甲虫を採集した。第２回目の滞日中に『博物場標本目録』の編集に関わったか，彼の採集した標本を寄贈したのだろう。それより先にロンドンで刊行した『日本甲虫目録』(A Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago：1879刊，2227種を採録）は日本の昆虫学者に大きな影響を与えた。

Montague Arthur Fenton（1850～1937：フェントン）もイギリス人で，明治７年から同13年（1874～1880）に日本に滞在，外国語学校（のちの東京英語学校）で英語を教え，各地に赴いて蝶を採集した。蝶類採集の弟子に田中館愛橘と石川千代松がいる（注６）。石川は明治15年（1882）７月に東大理学部動物学科を卒業しているので，フェントンは石川を介して動物学教室に出入していた可能性が大きい。博物場の標本は彼自身の採集品の可能性もある。

残る４ 名 については，当時日本を訪れた記録はなく，おそらくその著作に従って目録を作成したと考えられる。

Elliott Coues（1842～99）はイギリスに生まれ，アメリカに渡ってコロンビア大学に学び，鳥類学者となる。“Key to North American Birds” “Birds of the Northwest” などの著作があり，1877～82年はコロンビア大学解剖学教授であった。

Carl Claus（1835～99）はドイツ人で，ロイカルト（K.G.F.R.Leuckart）の弟子，甲殻類など海産動物の研究者。1873年にウィーン大学教授となり，多数の教科書を出版した。

Albert Carl L.G. Günther（1830～1914）はドイツ生まれの魚類学者，イギリスに渡って大英博物館の動物学部門に勤務する。著作 “Catalogue of the Fishes of the British Museum”（1859～70刊）は全世界の魚類6843種を収録し，著名である。

Samuel Pickworth Woodward（1821～65）はイギリスの博物学者・古生物学者。“Manual of the Mollusca”（1851～56）が著名。

『博物場標本目録』から判明した新事実を，一つ付け加えておく。それは魚類目録の14頁，Chromis sp.（スズメダイ類）に「Bonin Island Col. by Prof. Whitman（1880)」と添えてあり，これから東大の第２代動物学教授であったホイットマン（Charles Otis Whitman）が

表 2　『博物場標本目録』の大要：冊番号は，磯野が仮に付した。

冊	動物群（記載名に従った）	研究者氏名欄	頁
1	Aves	Elliott Coues	1 ～ 10
2	Amphibia & Reptilia	Carl Claus	1 ～ 9
3	Pisces	Albert C.L.G. Günther	1 ～ 27
4	Cephalopoda, Gasteropoda & Conchifera	S. P. Woodward	1 ～ 196
5	Coleoptera	George Lewis	1 ～ 21
6	Lepidoptera	M.A. Fenton	1 ～ 12
7	Crustacea & Arachnoidea	Carl Claus	1 ～ 18

表 3　『博物場標本目録』の詳細

冊	動物群(1)	和名	通し番号	標本数(2)	産地・来歴
1	Aves	鳥類	4184 ～ 4273	90	大半が日本産
2	Amphibia	両棲類	4324 ～ 4349	26	日本産と米国産，後者が多い
	Reptilia	爬虫類	4350 ～ 4423	74	日本産と米国産，後者が大半
3	Pisces	魚類	4424 ～ 4626	203	日本産と米スミソニアン研究所からの寄贈品，後者が大半
			5301 ～ 5377	77	
4	Cephalopoda	頭足類	1 ～ 7	7	東南アジアが多い
	Gasteropoda	腹足類	8 ～ 2498	2491	東南アジア・欧州・南北米大陸
	Conchifera	双殻類	2499 ～ 3446	948	同上，合衆国が多い
5	Coleoptera	鞘翅類	3524 ～ 3805	382	日本産
6	Lepidoptera	鱗翅類	3838 ～ 3950	113	日本産
			(3951 ～ 3980)	30(3)	日本産
7	Crustacea	甲殻類	3981 ～ 4176	196	日本産と米国産，後者が大半
	Arachnoidea	蜘蛛類	4177 ～ 4183	7	米国産のウミグモ類のみ

(1) 動物群の名称は原記載どおり。和訳名は飯島　魁『中等教育動物学教科書』(1888 ～ 89) によるが，「Conchifera ＝双殻類」は，岩川友太郎『生物学語彙』(1884) によった。

(2) 標本数は通し番号を単純に引算したもので，あくまでも目安である。

(3) 鱗翅類の最終 4 頁は通し番号書き入れがまったく無い。その部分の標本数は計30点で，これが3951 ～ 3980に相当すると考えれば，通し番号が鱗翅類から甲殻類に連続する。

明治13年（1880）に小笠原諸島を訪れていたことが明らかになったことである。目録23頁にも，同教授が小笠原で採集した Balistes sp.（モンガラカワハギ類）の標本が記されている。

（注１）磯野直秀，『モースその日その日』，有隣堂，1987年：259〜260頁。
（注２）現在は，東大総合研究博物舘・動物部門に保存されている。
（注３）登録番号を付けた人は最初の扉「AVES」だけを見て，後を開かなかったのか，この本を鳥類（Aves）の本と判断して，上記の書名と登録番号を与えてしまったようだ。それ故に鳥類関係の棚に入れられたまま，長いあいだ眠っていたらしい。私は博物場のことを知ったとき，目録があるだろうかと先生方に尋ねてまわったが，この目録を教えてくださった方は無かった。ただ，江崎悌三は博物舘の標本目録を目にしており，次の文を残している：「東京大学理学部の中に博物館が完成し，その時数冊の動物標本の目録が作られている。その中の一冊は鱗翅目のもので，‥‥蝶類一〇一種，蛾類四一種が登録されている」（江崎悌三，『江崎悌三著作集』，第２巻，101頁，思索社，1984年）。元は目録が個々のパンフレットだったことが，この記述から明白である。
（注４）図１左でわかるとおり，扉の中央部「CLAASSIFIED ACCORDING TO」の下に人名が記されている。この人物が分類・配列に関与していることを示すと考えられるが，表２に示した６名（Claus は２と７に名が出る）のうち，当時日本に滞在していて実際に博物場の標本を同定したと考えられるのは５の Lewis と６の Fenton だけである。ほかの４名は，それぞれの著作に従ったと解するのが妥当であろう。
（注５）魚類・昆虫・甲殻類・蜘蛛類の目録では，各頁右端の所々に「Original No.」と記した数字が加えられている。購入や寄贈で入手した標本に，元来記入されていた番号か。
（注６）中村和夫，M.A.Fenton から石川千代松への手紙，蝶と蛾，58（3），2007年：本稿の Fenton 生没年はこの報文に基く。また，本報文によると，Fenton の来日は明治６年（1873）夏であり，『博物場標本目録』鱗翅類の Original No. は Fenton 自身が作成していた目録の番号である。

5　『諸禽万益集』後書中の植物名

源止龍（左馬介）著『諸禽万益集』は，享保２年（1717）に成稿したもっとも古い総合養禽書として名高い（注１）。だが，その後書で著者は『草花伝』という園芸書も作成したと述べ，それに所収した種類を列記していることは知られていない。総数は，重出を除いて215の植物名（うち外来品は55）で，大半は草類である。それには初出と思われる草名が幾つも含まれており，園芸史にとっての好資料といえる。

そこで，国会図書館蔵特１―465本を用い，次の①〜④に区分して，概要を紹介しておきたい。各区分は原記載名の五十音順に配列し，（　）内には現和名や漢字表記を記した。なお，①と③は本資料より前に記載されている主要な種類だけを取り上げ，②と④は該当する初出例をすべて挙げた。

①室町時代〜江戸時代前期に渡来した外来植物：秋葵（トロロアオイ）・あらせいとう・黄梅・貴船菊（シュウメイギク）・夾竹桃・銀銭花・華鬘草・紅黄草・高麗菊（シュンギク）・午時花・秋海棠・銭葵・千日紅・仙翁花（センノウ）・朝鮮朝皃・鉄せん（テッセン）・日車（ヒマワリ）・美人草（ヒナゲシ）・鳳仙花・夕錦（オシロイバナ）・るこう草（ルコウソウ）・れんぎょ（レンギョウ）など。

②本資料で初出の可能性が高い外来植物：金糸梅・駿河蘭（注２）・時斗草・日々草・葉杜丹（注３）・葉ラン。このうちニチニチソウとハボタンは，従来言われていたよりも早く渡来したことになる。

③和産草類で，室町時代から江戸時代前期にかけて園芸品化されたと思われる種類：東菊・敦盛艸・梅鉢艸・ゑびね・おもと・風車・元日草（フクジュソウ）・雉子の尾・熊谷艸・鷺草・桜草・すかし百合・せうぜうはかま（ショウジョウバカマ）・仙台萩・花しようぶ・松虫艸・まゆばき（ヒトリシズカ）・宮城野萩・雪の下など。

④本資料で初出の可能性が高い和産植物：あみだがさ（シャジクソウ＝車軸草）・石持草（食虫植物の一つ）・ゑんこう艸（猿猴草）・京鹿子・草額（クサアジサイ）・熊野菊・白糸艸・達磨菊・釣舟艸・羽衣草・花忍・花蘘荷・はるりんどう・二葉葵・螢艸・ミセバや草（ミセバヤ）・ミツ柏・八代草・柳蘭・羅生門（ラショウモンカズラ）など。キョウガノコおよびミセバヤのように美しい花から，現在では園芸品として扱われないシャジクソウやイシモチソウなどまでが，この頃すでに出回っていたことがわかる。

（注１）磯野直秀，江戸時代の禽類図譜と養禽書，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，11号，1992年。

（注２）「駿河蘭」と記す由来は不明だが，漢名「建蘭」の中国南部産。

（注３）前報（磯野直秀，日本博物学史覚え書XIII，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，35号，2004年：該当するのは第２節）では『草木弄葩抄』が「葉ぼたん」の初出と記したが，本書が初出と判明したので，訂正する。なお，ボタンはいま「牡丹」だが，江戸時代には「杜丹」とも記された。

6　『本草綱目』寛文 12 年和刻本と貝原益軒

明の李時珍（1518〜93）の著作『本草綱目』初版が刊行されたのは，万暦24年（1596＝慶長元年）とされる。この名著はまもなく日本にも渡来し，やがて和刻本も出版された。和刻本は３系統あり，第１は寛永14年（1637）初刊，第２は万治２年（1659）初刊，第３は寛文12年（1672）初刊の系統である。この３点は版木が異なり，いずれも後年にそれぞれの版木を用いて後刷本が出版され，今日までに３系統14種類の和刻本が確認されている（注１）。

第３系統寛文12年本（注２）には，２つの特色がある。その一は，各冊末尾に漢名―和名対照一覧を付すること。いま一つは，貝原益軒（1630〜1714）の「本草綱目品目」と「本草名物附録」を収録した１冊が，附録として組み入れられていることである。この附録の存在によっ

表４　和名の比較

漢名	寛文本和名*	新刊多識編	本草綱目品目	大和本草
淫羊藿	也末土利久佐（ヤマドリクサ）	也末土利久佐	イカリクサ	イカリサウ
地榆	乃古岐利久佐（ノコギリクサ）	乃古岐利久佐	ワレモカウ	ワレモカウ
鼠麴草	穂於己久佐（ホオキクサ）	穂於己久佐	ハヽコクサ	ハヽコクサ
百部	保度豆良（ホドツラ）	保度豆良	キジカクシ	キジガクシ
沢漆	乃宇流之（ノウルシ）	乃宇流之	トウダイグサ	タウダイクサ
木蓮	末左岐乃可豆良（マサキノカツラ）	末左岐乃可豆良	イタビ	イタビ
曼陀羅花	也末奈須比（ヤマナスビ）	也末奈須比	テウセンアサガホ	テウセンアサカホ

*各冊末尾の漢和名対照一覧による。振仮名は，磯野が付した。

て，この和刻本は益軒が校訂して訓点を施したといわれ，古くから「貝原本」と呼ばれてきた（注３）。

しかし，本系統の『本草綱目』は誤訓が多いので，益軒が校訂し訓点を付与したとは考えにくいとの意見が以前から出されていた（注４）。

私も次の観点から，本系統の校訂・付訓に益軒は関係していないとの結論に達した。

①各冊末尾の漢和名対照は，たとえば「桔梗　阿利乃比布岐」「人参　加乃尓介久佐」のように，みな「漢名―万葉仮名による和名」として記されている。これは林羅山編『多識編』によく似ているので，比較してみると，『［新刊］多識編』(1631刊）の和名とまったく同じであった。すなわち，同書の丸写し（和名を記さない項は飛ばして）にすぎないと判明した。

②一方，附録となっている益軒の「本草綱目品目」は『本草綱目』の目次で，『本草綱目』の配列どおりに漢名の品目を並べ，時々漢名の脇に振仮名として片仮名で和名を記す（振仮名の無い漢名も多い)。そして，その和名は『［新刊］多識編』のそれとは異なり，貝原益軒著『大和本草』（1709刊）に用いられている和名と同じ場合が大半である。いま，表４に植物の例をいくつか挙げるが，動物の場合も同じである。もし，益軒が寛文12年本を校訂し，訓点をつけたのなら，本編の漢和名対照の和名に，附録での和名と異なる『［新刊］多識編』の和名をわざわざ用いはしないだろう。

③寛文12年本の用箋は，四周単辺・９行無界20字，枠の大きさは縦約17×横（オ面の右端～柱）約12cm であるが，益軒著の附録だけは，四周単辺・８行無界18字，縦19.5×横13.5㎝と，枠がかなり大きい。並べると違和感を覚えるほどの違いである（不思議だが，この用箋の相違は今まで指摘されたことがない)。寛文本に最初から附録を組み入れる企画であったならば，体裁からも同じ用箋を使うのが当然だから，附録は後から組み込まれたように思える。

④さらに一つ疑問がある。『益軒先生年譜』（注５）の寛文12年（1672）とその前後には『本草綱目』出版に関する記事はまったく無い。一方，延宝８年（1680）条の冒頭には「八年庚申

先生五十一歳，輯本艸綱目目録和名（割注：本草綱目無総目，観者労于検閲，且先輩之和名多註誤，故先生輯之，且改正其和名）」と記されている。これは，まさに「本草綱目品目」の意図および内容に一致する。とすると，「本草綱目品目」はこの年に作成されたのではないか。残念ながら，『年譜』にはその出版に関する記事は見出せないが，推定が正しければ，寛文12年初刊本には益軒の「附録」が入っておらず，延宝８年以降の刷本に取り入れられたということになる。今後，検討すべき問題であろう（注２参照）。

以上の４点から，貝原益軒は寛文12年本の校訂・加訓には関わっていないように思う。したがって，寛文12年本を「貝原本」と呼ぶのは穏当ではない。

（付）本稿で取り上げた「本草綱目品目」には，前述のように『大和本草』に使用されている和名の多くが記されている。同じことが「本草名物附録」（注６）にも言える。したがって，従来『大和本草』に初出すると言われてきた和名で，上記の２書に初出する場合が少なくない。そこで，私の調べた限りで「本草綱目品目」「本草名物附録」に初出する和名を挙げておく。いずれも原記載名を平仮名の現代表記として五十音順に配列，記載名と現和名が異なる場合は（　）内に現和名を片仮名で付した。［　］は磯野の注。

●「本草綱目品目」に初出する植物名：あぶらぎり，いかりくさ（イカリソウ），いしみかわ，いぬなずな，おにばす，かにくさ，かもあおい，かわらさいこ，ぎょうじゃにんにく，くがいそう，くさいちご，くまざさ［隈笹］，こえんどろ，こくさぎ，こんぎく，ししうど，じゃけついばら，すいば，せんぶり，たかさぶろう，たんきりまめ，ちょうせんあさがお，とうあずき，のげいとう，はこねくさ（ハコネソウ），ふうとう（フウトウカズラ），べんけいそう，ほこりたち（ホコリタケ），むまのあしがた（ウマノアシガタ），やぶみょうが

●「本草名物附録」に初出する植物名：かぜくさ，れんげはな（ゲンゲ），ぜにあおい，つるぼ，なつずいせん，もりぐちだいこん，りょうぶ

●「本草綱目品目」に初出する動物名：うちすずめ［蛾］，おおばん［鳥］，かめのて［甲殻類］，さるか［キュウカンチョウの異名］，さんしょううお，やがら

●「本草名物附録」に初出する動物名：あほうどり，きくすい［カミキリ類］，しまむらがに［ヘイケガニ異名］，しゃこ，すずめふぐ［ウミスズメ異名］，すなめり［鯨］，たけぶんがに［ヘイケガニ異名］，はなおれだい，はるぜみ，ふなむし，よめがさら［貝］

（注１）岡西為人，『本草概説』，創元社，1977年：該当するのは229―233頁。

（注２）寛文12年本の系統は計５種類あり，下記の順序で出版されたらしいが，初刊以外は刊記が無いか，あっても「寛文十二年」のままであり，それぞれの出版年が不明である。

①『本草綱目』（寛文12年初刊本：角書ナシ）

➡②『［和名入］本草綱目』（［　］内は角書，以下同じ）

➡③『［校正］本草綱目』

➡④『［和名入］本草綱目　校正』（［校正］は題箋書名の下，次も同じ）

➡⑤『［増補］本草綱目　校正』

①は牧野富太郎が入手したと，自身で記している（牧野富太郎，日本デ翻刻シタ李時珍ノ『本草綱目』，植物研究雑誌，３巻８号，1926年）が，高知県立牧野植物園の『牧野文庫蔵書目録』には見えない。稀本らしく，この初版本についての報告は他になく，所蔵する図書館もわからない。

（注３）寛文12年系統本には校訂・訓点者の名が何処にも記されていない。日本人の序文・跋文も見当たらない。ただ，附録の「本草綱目品目」の冒頭に「貝原篤信輯録旁訓」とあり，この記載から「貝原本」と呼ばれてきた。

（注４）渡辺幸三，『本草書の研究』，杏雨書屋，1987年：該当するのは136〜144頁。

（注５）貝原好古編撰，『益軒先生年譜』，『大和本草』翻刻版（白井光太郎考註），有明書房，1983年。

（注６）「本草名物附録」は，全209項。いずれも漢名に和名を振り，出典・来歴・形態・異名などを記している。たとえば，「虞美人草（ビジンサウ）　名花譜云。花四弁，色艶紅，類二罌粟一而小‥‥」「緋魚（アコ）　興化府志。赤魚也」。罌粟はケシである。

7　『草木弄葩抄』と『絵本野山草』

前回の「覚え書」（注１）で取り上げた園芸書の稀本，菊池成胤著『草木弄葩抄（ろうはしよう）』（国会図書館蔵，図なし）について，新しい事実が判明した。著名な絵本の一つで，博物誌の好資料でもある橘 保国著『絵本野山草』（注２）に『草木弄葩抄』の記文が大量に使われていたのである。

『草木弄葩抄』（209項：以下，『弄葩抄』と略）は享保20年（1735）に刊行された。『絵本野山草』（以下，『野山草』と略）の出版はその20年後の宝暦５年（1755），全163項目で写実的に描かれ，特徴などの詳しい記文が付されているが，じつにその半数にあたる82項で『弄葩抄』の対応する項目（注３）から，記文の全部あるいは一部分を転写している。そのうちの３例を下に挙げておく。句読点はいま加えたが，濁点の有無は『弄葩抄』『野山草』ともに，原本どおりとした（注４）。振仮名は一部を除いて，省略した。［　］は磯野の注あるいは原文の現代表記である。

第１例：「一りん草」

『弄葩抄』：「花葉共に梅花草に似て，小ふり也。しの立，一りんつゝ花さく。夏雪草ともいふ。此すこし大ふりなるを，一花草といふ。梅花草とハ，花のつきやうに，ちかいあり」

『野山草』：「花葉ともに梅花草に似て，小ぶり也。しのだち，一りんつゝはなさく。夏雪草ともいふ。此少し大ふりなるを，一花草といふ。梅花草とハ，はなのつきやうに，ちがひあり」

♣表記が少々違う（漢字→仮名，濁点の有無など）だけで，文はまったく同一である。

第２例：「せいらん草」

『弄葩抄』：「花のかたち，黄けまんのことく，いろ，うすきるりなり。葉ハみそはぎの葉に

よく似たり。葉に斑入あり」

『野山草』:「はなのかたち，らしやう門のごとく，いろ，うすきるりなり。葉ハ，みそはぎのはに，よく似たり。葉に斑入(ふいり)あり。五月，はなあり」

♣後者は，「黄けまん」を「らしやう門」に換え，「五月，はなあり」を追加しているが，それ以外は表記がやや異なるにすぎない。

第３例：「しらん」

『弄葩抄』：葉，黄けい［黄蕙］の葉に似て，なかく，こわし。花しの立のひて，らんの花のことき本紫いろの花さく。花のうち舌(した)有。同し紫色に白き粟粒(なゝこ)すこしあり。又，うす紫あり。うすけいとも，紫けいともいふ。又，白けいといふあり。花のいろ，しろし。一種，白に紫の咲わけあり。葉ほそく，なかし。常の葉よりハ小葉にして，茎をまき，だんだんに葉いつる。かハり［変わりもの］なり。至極上品。なかめにあかす［眺めにあかず］。常々いださゞる事をうらみとするのミ」

『野山草』：葉，黄蕙(わうけい)のはに似て，ながく，こハし。花しのたちのびて，らんのごとき本紫色の花さく。花のうち舌あり。同く紫いろに白き粟粒(なゝこ)すこし有(ママ)あり。又，うすむらさき有。うすけいとも，紫けいともいふ。又，白けいといふ有。花のいろ白し。一種，白に紫の咲わけ有。葉ほそく，長し。つねの葉よりハ小葉(こは)にして，茎をまき，だんだんに葉出(いつ)る。至極見事なり」

♣これも，表記の違いのほかは，最終部の文がやや異なるだけである。

御覧のように丸写しに近いのだが，無断転載であって，『野山草』の序にも何処にも断りは無い。転写は上例のように瓜二つか，多少の修正・追加を加えた場合が大半を占めるが，『弄葩抄』の記文があまりにも長い場合は，一部分だけを用いている。

なお『野山草』では，『弄葩抄』の「小春草」を「小青草」としたり，同「らん」中の「鳳蘭」を「鳳茶」とするなど，誤写が時折り見受けられる。

参考のために，『野山草』のうち，『弄葩抄』の記文を転写した項目の草名を記しておく。草名は『野山草』本文で記文見出しの名称（注５）を用い，配列は本文中の配列に従った。それが『弄葩抄』の使用名と著しく異なる場合は，（　）中に『弄葩抄』での名称を示した。

巻１：しらん，けまん草（『弄葩抄』のけまんと黄けまんを合併），熊谷草・敦盛草，ほたる草，蘭菊草，馬蘭（ばりんあやめ），いちはつ，一りん草，あやめ，桔梗，下野，車軸草，をだまき草，紅黄草，とけいらん，丁字草，かたこ草，眉はき草，くかい草，かるかや，平紅帯（ひごたへ），うこん草，風蘭，石斛，黄蕙

巻２：時計草，郭公草（ほととぎす草），さくらな（桜草），しやが，せんだい萩，花忍，熊野菊（はんくわい草），うつぼ草，ほうちやく草，蕙蘭（らん），八代草，松本せん，水かふほね（かふほね＝河骨），かきつばた，九曜草

巻３：花しやうぶ，せいらん草，しんこ花（もぢずり草），草がく，白糸草，なでしこ，山吹

草，小青草（小春草），いかり草，あざみ，草蓮花，虎尾，三ツかしは，秋海棠，鳥かぶと，あけぼの草，千日紅，ひあふぎ，藤撫子，あらせいとう，七りん草（九りん草），羅生門

巻４：水あふひ，さぎ草，野藤（草藤），秋牡丹（きぶね菊），だるま菊，竜胆

巻５：玉簪花（ぎぼうし），きりん草，翁草，釣船草，松むし草，風車，鉄線花，唐松草，冨貴草（金梅草），れんの花（唐れん），すみれ草（三国草），ゑびね草，九りん草，いちご

（注１）磯野直秀，日本博物学史覚え書XIII，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，35号，2004年：該当するのは第２節。

（注２）橘 保国，『絵本野山草』，八坂書房，1982年。

（注３）記文が大同小異でも，両書で見出しが異なることがある。また『弄葩抄』の「けまん」「黄けまん」を『野山草』では「けまん草」の１項にまとめている。一方，『弄葩抄』の「九りん草」を『野山草』は「七りん草」と「九りん草」の２項に同文で重複して用いている。このような点に注意を要する。

（注４）『弄葩抄』の記文には，濁点がほとんど使われていない。そのため，意味が取りにくい場合は，『野山草』の該当項をみてほしい。

（注５）『野山草』では，目録・記文・図で用いられている植物名が異なる場合が少なくない。ここでは，記文の見出しの名称に統一した。

8　19世紀前半におけるシダ類の記録

江戸時代園芸の特色の一つはシダなども鑑賞の対象としたことだが，それには19世紀前半に活躍した水谷豊文や大窪昌章（まさあき），伊藤圭介など，尾張の博物家が大きく寄与したように思える。行動に制約の多い江戸の幕臣などと異なって，尾張藩士たちはしばしば採薬（採集）に出かけており，しかも尾張の周辺には木曽・美濃・伊勢・熊野など，シダなどの豊かな山地が広がる。当然ながら，その採薬記には，シダの新たな名称が次々に登場するのである。

大窪昌章は，入手した草木を年度順に整理した『昌章草木集』（注１）を残したが，それを見るとシダ類を数多く花戸（植木屋）からも手に入れている。ということは，名古屋の園芸界ではシダ類がすでに商売の対象だったことを物語る。

そこで，以下の部分では，19世紀初頭の植物名を数多く収録していると思われる『本草綱目啓蒙』をまず挙げ，ついで年代順に尾張藩博物家の著作を中心に調べて，シダ類を採録した。当時はシダ・コケ・地衣類をはっきり区別していないので，後二者も含めた。

記載に当たっては――

⑴　原記載の品名（平仮名）は現代表記に直し，五十音順に配列。（　）内は原記載の異名・現和名（片仮名）・漢字名など。資料①以外は新出名だけを採録した。

⑵　品名には「斑入（ふいり）」や「小葉」，地名などの冠称は省き，また「嵯峨坂シダ」のように産地名だけを冠した品名は，現和名に用いている場合を除き，採録しなかった。

⑶　図や詳細な記述が無いので，各記載名が現在の同名の種類を指すか否かは不明。

⑷　コケ類は［コケ］，地衣類は［地衣］と注。そのほかはシダ類である（注２）。

①『本草綱目啓蒙』，小野蘭山，享和３年（1803）刊。
あかうきくさ，あたごごけ（ようらくごけ：クラマゴケの異名➡②），いぬどくさ（かわらどくさ），いのもとぐさ（とりのあし），いわおもだか（ときわのおもだか），いわがねそう，いわひば，うらじろ（おおしだ），うらぼし，かたひば（ひめひば），かにくさ（かにづる，しゃみせんづる，つるしのぶ），きじのお，きんさじ，くじゃくそう（あしなが，ぬりばし，よめのぬりばし，よめのかんざし），こうやのまんねんぐさ［コケ］，こごみ，こしだ，さるおがせ（猿苧桙，きつねのもとゆい，くものはな）［地衣］，しのぶ（しのぶぐさ），しらがごけ［コケ］，すぎごけ［コケ］，すぎな，ぜんまい，でんじそう（かたばみも，たのじも），とうげしば，とくさ，なつのはなわらび，のきしのぶ（やつめぐさ），はこねぐさ（いちょうしのぶ，いちょうぐさ），はなごけ［地衣］，はなわらび（ふゆわらび，現フユノハナワラビ），ひかげのかずら（きつねのおがせ，きつねのたすき，てんぐのたすき，さがりごけ），ひとつば（いわがしわ，いわぐみ），へご，ほなが，ほらしのぶ，まめづた（まめごけ，いわまめ），まんねんすぎ（にっこうのまんねんぐさ），みつでうらぼし，やぶそてつ（いわしぼね＝鰯骨，むかでぐさ），やまそてつ（ほそばきじのお），わらび
［本書以前の文献に，「いぬしだ，いぬわらび，いので，おにわらび，がんそく（雁足），くさそてつ，くまわらび，こたにわたり，ぜにごけ，ちくらん，はなやすり，みずわらび」などの名も収録されている］

②『物品識名』，水谷豊文，文化６年（1809）刊。
いとごけ［コケ］，いわひも，おさくさ，おにへご，くものすしだ，くらまごけ，くりはらん，こうやわらび（ぜんまいしのぶ），さんしょうも，たましだ，つるしだ（たつしのぶ），ぬりとらのお，まつばらん，みなもとそう（かわぜんまい），らんちゅうしだ，りゅうびんたい

③『木曽採薬記』，水谷豊文，文化７年（1810），筆写本。
しのはちれんだ（シノハチ＝スリバチ，➡⑧すりばちれんだ），しゅもくしだ，せきだぐさ（雪駄草），びろーどしだ，ふじしだ，へんねれす（➡⑦，注４も参照），へんびのござ（➡⑧へびのねござ）

④『勢志紀熊野採薬記』，水谷豊文，文化13年（1816），自筆筆写本。
いわひとで，うすいた（薄板），おにしだ，ししらん，たちしのぶ，ずいりょうしだ，べにしだ，ほうびしだ（鳳尾羊歯），まつざかしだ

⑤『城和摂諸州採薬記』，丹羽松斎，文化14年（1817），筆写本（注３）。

いわでんだ，からかさごけ［コケ］，なんかくらん

⑥『昌章草木集』，大窪昌章，文政元年～７年（1818～24）の分，筆写本（注１）。
文政４年：こがねしだ，ほらごけ／５年：いわすぎ（現スギラン），おおいのもとそう，かぐま，じゅうもんじしだ，よろいらん，りょうしだ（現イシカグマ）／６年：おさしだ，おにぜんまい／７年：あついた（厚板），うしごみ（現ウシゴミシダ？），こがねわらび，ししみつばうらぼし，はりがねしだ

⑦『物品識名補遺』，水谷豊文，文政８年（1825）刊。
あすひぐさ，あつしのぶ，いぬがんそく（へびのせった＝蛇ノ雪駄），うしごみしだ（牛込羊歯），かさごけ［コケ］，すじひとつば，すじわたし（かなわらびの葉中，黄道あるもの），ちゃせんしだ，とらごけ［コケ］，ひめわらび，ふゆしのぶ，みずごけ［コケ］：「へんねれす（➡③）＝ぬりとらのお異名」（注４），「おにぜんまい＝ほうびしだ」の旨の記載がある。

⑧『信州木曽草木産所記』『信州木曽山産草類伊呂波寄』，大窪昌章，文政８年（1825），筆写本。
かわらぜんまい，さわらぜんまい，てんだ，でんだぜんまい，ひのきぜんまい（以上５件クサソテツ類方言），いわまつ（いわひば），すりばちれんだ（ヤマソテツ方言：➡③しのはちれんだ），ひのきげんた（おおぜんまいしだ），へびのねござ（➡③へんびのござ）

⑨『昌章草木集』，大窪昌章，文政８年～天保４年（1825～33）の分，筆写本。
文政８年：ししひとつば／９年：うすいたしだ（➡④うすいた），えびすひとつば，おおたにわたり，おとひめしだ，こおさしだ，はんざいしだ／12年：つるでんだ／天保元年：ししいのもとそう／４年：あすひかずら（➡⑦あすひぐさ），つるとらのおしだ

⑩「伊藤圭介メモ」(シダ類を５類に分ける試み)，天保４年（1833），伊藤圭介・篤太郎編『錦窠羊歯譜』冊１所収。
おどりこしだ，しけくさ，しもふり，すじしだ，ちりめんしだ，にしきしだ，はりしだ

⑪『本草摺影』，大窪昌章作成の印葉図集，昌章が没した天保12年（1841）以前の作成：影印本（京都書院，1964年）による。
あおひとつば，ほうらいしだ，みずぼうふう，やぶしのぶ，らんちゅうしのぶ

⑫『本草図譜』，岩崎灌園，弘化元年（1843）：（　）内は『本草図譜総合解説』（北村四郎ほか，同朋舎，1986～91年）で同定された現和名。
いわひげ（シシラン），いわみの（岩蓑，ヘラシダ），いわもみ（ナンカクラン），えいざんごけ（クラマゴケ），えんこうそう（猿猴草，ナンカクラン），おきなしだ（マツザカシダ），

からすのあし（ハコネグサ），かんしのぶ（タチシノブ），くさぜんまい（ヒメワラビ），こもちしだ（子持羊歯，コモチシダ），さるのしょうが（アオネカズラ），すぎらん（スギラン），せいりょうかずら（青竜葛，イワヒトデ），にしきしょう（タマシダ），はるのはなわらび（ナツノハナワラビ），ひかげわらび（フユノハナワラビ），ひもらん（ヒモラン），へびのした（ヘビノシタ＝ヒメハナワラビ），ほうおうしだ（鳳凰羊歯，イワガネソウ），ほしひとつば（クリハラン），みるらん（ビロードシダ），やしゃぜんまい（ヤシャゼンマイ），やつめらん（八目蘭，ノキシノブ），やまうばのおくず（山姥ノ苧屑，サルオガセ），よめがほうき（嫁ガ箒，クジャクソウ）

ここに取り上げた資料のうち，②から⑪までの10点が尾張の博物家によるもので，19世紀前半のほぼ全般にわたって連続し，資料ごとに新たな名が次々に加わっている。尾張の人々のシダへの関心が高いことが明らかである。

一方，江戸では，弘化元年に完成した大著『本草図譜』（⑫）だけを挙げたが，尾張での使用名と異なるものが目立つ。たとえば，尾張のビロードシダに対して江戸のミルラン，尾張のクラマゴケと江戸のエイザンゴケ，イワヒトデとセイリョウカズラ，マツザカシダとオキナシダという具合である。江戸のシダ名は花戸の名付けたものが多いような気がするが，確証は無い。ここでは，違いを指摘するに留める。

さて，上記資料から明らかなように，異名も含めてだが，19世紀初頭には80ほどだったシダ類の名称が，半世紀後（資料⑫まで）には約200に増えた。もちろん，上記の諸名には異名同種や同名異種も多いと思われるし，当時「異名」と記された名が現在は別種に用いられている場合もあって，なかなか複雑である。ともあれ，19世紀前半にシダ類に対する関心が急速に深まったことが見てとれる。

名には直ぐ消え去ったものもあるが，標準和名や別名として生き残っている場合も少なくない。当然かもしれないが，「くものすしだ，こもちしだ（子持ち羊歯），ちゃせんしだ（茶筅羊歯），でんじそう（田字草），はなやすり（花鑢），からかさごけ［コケ］」のような旨い命名や，「てんぐのたすき（天狗の襷），へびのした（蛇の舌），へびのねござ（蛇の寝蓙），よめのぬりばし（嫁の塗箸）」などのユーモラスな名は生き残り組である。

また，シダの古称である「れんだ」（連朶）も「しのはち<u>れんだ</u>」（③），「すりばち<u>れんだ</u>」（⑧）として健在であり（注２参照），「れんだ」が訛った「ひのき<u>げんた</u>」「<u>てんだ</u>」「<u>でんだ</u>ぜんまい」（以上⑧），「いわ<u>でんだ</u>」（⑤），「つる<u>でんだ</u>」（⑨）も登場する。古称が生き残るとともに，音の転化も始まっていたことがわかる。

この後も尾張のシダ資料は続くので，参考までに２点挙げておく。

⑬『皇和真影本草』，巻３，吉田雀巣庵ほか，安政４年（1857）刊：シダだけ50品の印葉図集。あまくさしだ，うすわらび，えびらしだ，おうれんしだ，おおばあまくさしだ，おおばいのもとそう，げじげじしだ，しけしだ，たにそてつ，つるかんじゅ（蔓貫聚），とらのおしだ，

にっこうしだ，はちじょうしだ，へらしだ，ほしだ（穂羊歯），ほそばかなわらび，ほんぐうしだ，やのねしだ，やまやぶしだ，りゅうきゅうしだ

⑭『羊歯集考』（羊歯目録），松井丹右衛門，幕末〜明治初年の作成か，筆写本（注５）：以下は本資料に新出し，現在も和名・別名に用いられている例だけである。
いしかぐま，いたちしだ，いちょうしだ，いつまでぐさ，いわとらのお，うちわごけ，うらじろしだ（ウラジロとは別品），おおあまくさしだ，おおかぐま，おしゃぐじでんだ，きくしのぶ，こうもりしだ，さじらん，じくおれしだ（軸折羊歯），ししがしら（獅子頭），しのぶかぐま，しょりま，たまぼうき（玉箒），つやなしいので，とうごくしだ（東谷羊歯），なちしだ，ぬかぼしくりはらん，はしごしだ，ひめしだ，ふもとしだ，みずしだ，みぞしだ，やまどりしだ，ようらくしだ（瓔珞羊歯），りょうめんしだ（両面羊歯）

⑬と⑭はシダ類だけの著作で，その新出名は併せて50ほど，これを加えれば全部で250ほどになる。尾張では，作成年は不明だが，丹羽（にわ）修治作成のシダ33品の印葉図集『真影羊歯（しだ）類』も残る。このようにシダの専書が作成されたのは尾張だけと思われ，とりもなおさずシダへの関心の深さを示すといえよう。シダの和名で尾張やその周辺の地名に由来する例がいくつも存在すること（注６）も，偶然ではないと思える。

（注１）『昌章草木集』は大窪昌章が文政元年〜天保４年（1818〜31）のあいだ，入手した品の名を年次順に記載した覚え書である。本稿では他資料と比較するために，文政元年〜７年の分と文政８年〜天保４年の分を分けた。なお，採集・交換・購入などの区別，入手先の氏名や採集地をつねに併記しているので，昌章の交流関係や，尾張とその周辺の植木屋（約40名の名を記録），植木市の開催地などに関する好資料でもある。

（注２）『［改訂増補］牧野新日本植物図鑑』（北隆館，1989年）によると，シダの古名には「れんだ」（連朶：イワデンダの項の解説）・「かぐま」（イシカグマの項）・「へご」（ヘゴの項）があり，「れんだ」は訛って現在の「デンダ」「ゲンダ」になった。一方，⑭に出る「ショリマ」はクサソテツのアイヌ語に由来するという（ヒメシダの項）。

（注３）『城和摂諸州採薬記』は，筆録者である尾張藩の丹羽松斎が水谷豊文に同行して，大和・摂津・山城（京都）を巡回したときの記録。

（注４）『園芸大辞典』（誠文堂新光社）の「はこねしだ」項への牧野富太郎補注に，「ケンペルはハコネシダ（ハコネソウ）をホウライシダ Adiantum capillus-veneris と間違えていた。そこで，ハコネシダを「カッペレ草」「ヘンネレス」とも呼ぶ誤りが生じた」旨の記述がある。実際，『嘉卉園随筆』（1750年頃成立）の「箱根艸」項には「箱根艸‥‥蛮名カツテイラ，又ヘンネレス，或はカツペレソウ」とある。しかし，それがヌリトラノヲの異名に転じた経緯は，まだ明らかではない。

（注５）この資料は，国会図書館伊藤文庫の伊藤圭介・篤太郎編『錦窠羊歯譜』冊１に『羊歯

集考』（自筆本），国会図書館白井文庫に『羊歯目録』（転写本，山本復一旧蔵）の題名で伝わる。松井丹右衛門（1814〜84）は尾張藩士で水谷豊文の弟子，嘗百社員。名は吉蔵（？），字益江，号朝寝斎・躑躅園・胡桃園・雨白・白翁など。山本復一（1840〜1912）は山本榕室の長男，山本亡羊の孫。

（注６）トウゴクシダは尾張の東谷（とうごく）山（名古屋市と瀬戸市の境），フジシダは犬山の尾張富士（入鹿池の西），ホングウシダも同じく犬山の本宮山（尾張富士の南：豊橋の北にある本宮山ではない），オシャグジデンダは木曽御社貢寺（おしゃぐじ）の名に基く（資料⑭および注２に挙げた『牧野新日本植物図鑑』などによる）。

９　江戸博物誌を調べる。

ここでは，江戸博物誌を調べるときの注意を二三述べておきたい。

第一は，資料の選択。明治以降の活字出版物で，ある書名の本を探すのなら，何らかの手段でそれを所蔵する図書館を探し，そのなかで手近な図書館を訪れて閲覧するなり，借り出すなりすれば済む。ところが，江戸時代の書物はそう簡単には事が運ばない。

幕末までの資料は圧倒的に筆写本が多い。江戸時代の日本は世界一の出版国だったとよく言われるが，博物誌のように少数部しか売れない書物は，本屋がなかなか手を出さない。といって，自費出版は費用がかさむ。したがって，10の資料のうち９までは筆写本として残っており，そのなかで見どころがある資料は転写を重ねて伝わることになる。

ところが，転写本は十人十色で，一筋縄では行かない――①字が読みやすいか・読みにくいか，図は巧いか・拙いか，②字句や図の誤写の多少，③抄写（筆写者が不必要な項目や文，図を省略して写す）か否か，④筆写者による追加（自分の見解や，他書からの引用を加える）の有無，⑤筆写者による改題などを検討して，できるだけ優れたものを選択することが望まれる。

たとえば，幕医栗本丹洲の『千虫譜』は日本最初の虫類図譜として知られ，著者自筆の原本は失われたが，多数の転写本が残る。私は24点を実見したが，図の巧拙はもちろん，所収図数や記文（注記）の内容，配列の順序などが本ごとに違う。それを一つ一つ調べて，信頼できる資料を選び出すまでに，長い時間を要した（注1）。

資料の選び方一つで，とんでもない結果になることもある。『鳥賞案子（ちょうしようあんし）』は江戸時代でもっとも流布した総合的養禽書で，部分的写本を含めて少なくとも12の異なる題名をもつ25点を確認しているが，そのうちの『飼鳥必用』は誤写が少なくない。たとえば，「嶋イスカ」を「鳴イスカ」と誤写してしている（崩し字の山偏は，口編に似る）。ところが，『飼鳥必用』のイスカの個所が明治末に出版された『古事類苑』に引用され，それを見た当時の鳥類学者が「鳴イスカ」を和名として採用してしまった。そのため，「ナキイスカ」という意味不明の鳥名が誕生し，現在も使われているのである（注２）。

刊本ならば良いかというと，そうは問屋がおろさない。江戸時代の印刷には版木を用いたが，版木は一部を削って新たな木片（入れ木）を埋めれば，語句や文の変更が簡単に出来る。そのため，同一題名の刊本でも，内容が異なる場合がある。リンネ分類体系を初めて紹介した伊藤

圭介著『泰西本草名疏』の初版は，シーボルト事件直後の文政12年（1829）に刊行されたので，シーボルトの名を伏せて「稚膽八郎」なる偽名を用いている。そして，おそらく四半世紀を経た開国後に，圭介はその個所を「来舶西医」と改めた第一後修本を刷り，ついでシーボルトの日本追放も取り消された後の文久２年（1862）に，「来舶西医」を「西医椎氏」（椎氏＝シーボルト）と再修正した第二後修本を出した。また，違いはここだけでなく，凡例で「稚氏」（＝稚膽氏）としていた数個所の「禾」偏の「ノ」を，第二後修本では削って「椎氏」にしているし，後修本では本文も相当改めている（注３）。

こんな例もある――絵本『龍の宮津子』は鍬形蕙斎画の魚貝図譜で，品名を詠み込んだ俳句と，その作者の俳名を各品に添えている。ところが，同じ版木を用いた改題後刷本『魚貝譜』では何故か俳名だけを消し，再改題本『魚貝略画式』では俳句もすべて取り去ってしまい，詠み込まれていた魚貝名までわからなくなっている（注４）。

第二に，転写図の問題がある。冒頭に記した『唐蘭船持渡鳥獣之図』と出会って江戸時代の鳥獣図譜を片端から調べ始めたとき，いくつもの資料で『唐蘭船‥‥』と瓜二つの図を見出した。幕府に送った絵図あるいは『唐蘭船‥‥』の転写であろう（注５）。

高松藩主松平頼恭侯が編集した『衆鱗図』４帖中の魚介図も，数多くの魚介類図譜に転写されている。この件も多くの図譜を調べた末，幕医栗本丹洲が『衆鱗図』の第３帖と第４帖を見る機会を得て，その２帖の図をすべて転写して丹洲自身の魚介譜に加えたらしいとわかった。そして，その丹洲魚介譜をまた多くの人が見た際に，とりわけ美麗な『衆鱗図』由来の図を再転写する。さらに，それが継写される‥‥という具合に拡まったようである（注６）。

このような転写図は，現在ならば「剽窃」とされるに違いないが，当時はそうではなかった。いま書店の棚に図鑑が数多く並んでいるのは，動植物の品名を決めるのに図がもっとも役立つからである。ところが，江戸時代には多くの図を版木に彫って図譜を出版するとなれば，莫大な費用を要し，薩摩のような大藩でさえ，藩主の作らせた図譜を刊行しようとしても，なかなか実行できなかった。まして学者で図譜を出版するのは，きわめて稀であった。となると，これはと思う図を見かけたら，転写して手元に置くしか方法が無い。そこで，転写図をいたるところで見かけるということになるのである（注７）。

ただ，困ったことに，転写図に出典を記すことはほとんど無かった。そこで，転写図を転写者自身が実写したように判断する場合が，これまで少なからずあった。たとえば，丹洲の魚介図譜中の『衆鱗図』に由来する図は，丹洲自身のスケッチと評されていた。今後は，図の由来については，より慎重な判断が求められると思う。

第三。新しい資料を見つけるにはどうすれば良いかと問われることがままあるが，江戸時代の資料はどの公共図書館でも閉架式の書庫に収まっていて，閲覧者が書庫で資料を探すことはできない。大学図書館でも学外者の書庫立入りは禁止されているのが普通である。したがって，図書館で次々に資料を請求するほかない。それでも『○○魚譜』とか『△△採薬記』のように中味の見当がつく場合はましだが，『閑窓録』とか『猶存録』など，題名では見当のつかない資料も多い（注８）。それを次々に請求して閲覧するのだが，役に立ちそうな資料は10か20の

うち１つで，掘り出し物は数百に１つ出会えれば素晴らしい幸運というところだろうか。ともかく20年のあいだ，その繰り返しで，『東莠南畝譏』や『九淵遺珠』などの好資料に巡り合えたのであった（注９）。結局，資料探しに名案は無く，根気と運がすべてという気がする。

もっとも，対象を広げることは一つの手と思う。私は現在の動植物名がいつ頃から使われているかに関心があるが，それには室町時代〜江戸時代の日録・日記類・辞典類（日葡辞書や，一種の国語辞典である節用集の類），俳諧書，画家のスケッチ集などが有用なことに気付いた。学者の手に成る資料は漢名中心になりやすいが，上記の資料には民衆が日常的に使っている言葉が登場し，往時の呼び方を知るのに都合がよい（注10）。博物書・本草書・園芸書・農書ばかりでなく，異なった分野にも目配りすると，意外な収穫が得られる。

細かいことを長々と記してきたが，私が古資料の世界に第一歩を踏み入れたとき，どのような点に配慮して調べればよいかとか，江戸時代には転写図が多いとかを注意してくれる著作はまったく無く，そのために回り道をしたり，失敗を重ねたりした。そこで，これからこの道に進む方々に，そういう点を語っておく必要を痛切に感じているからである。

（注１）磯野直秀，『千虫譜』諸写本の比較，参考書誌研究，44号，1994年。

（注２）磯野直秀，江戸時代の禽類図譜と養禽書，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，11号，1992年：ナキイスカの件は32頁。

（注３）磯野直秀，『泰西本草名疏』の初版本と後修本，科学医学資料研究，250号，1995年。

（注４）国立国会図書館編，『図録・描かれた動物・植物』，国立国会図書館，2005年。

（注５）磯野直秀・内田康夫，『舶来鳥獣図誌：唐蘭船持渡鳥獣之図と外国産鳥之図』，八坂書房，1992年。

（注６）磯野直秀，『衆鱗図』と栗本丹洲の魚介図，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，15号，1994年：『衆鱗図』の転写図は，丹洲の描いた魚介図の半数近くを占める。

（注７）磯野直秀，江戸時代動物図譜における転写，『東アジアの本草と博物学の世界』（山田慶児編），上巻，思文閣出版，1995年：注４文献も参照。なお，植物の場合は転写図が比較的少なく，動物の場合に多いようである。

（注８）『閑窓録』は貝化石の図譜（磯野直秀，日本博物学史覚え書Ⅶ，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，26号，1999年），『猶存録』は菊の形状に関する用語を図で解説。ともに，この題名では内容がまったくわからない。

（注９）磯野直秀，『九淵遺珠』：丹羽正伯の物産記録，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，17号，1995年／磯野直秀，『東莠南畝譏』：18世紀前半の動植物図譜，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，18号，1995年。前者は徳川吉宗の物産政策で中軸にいた正伯の残した記録，後者は初期彩色図譜の一つで，もっとも古く，かつ正確なギフチョウ図などが含まれ，のちに飯沼慾斎がその大部分を自編『本草図譜』に転写している。

（注10）磯野直秀，『日葡辞書』の動物名，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，34号，2003年。／磯野直秀，博物誌資料としての『草花魚貝虫類写生図』，MUSEUM，590号，2004

年／磯野直秀，博物誌資料としての『お湯殿の上の日記』，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，40号，2006年：本稿の第3節も参照。

謝辞

本稿第4節「東京大学理学部博物場の動物標本目録」中の外国人研究者について，内田康夫・奥谷喬司・坂本一男・田中　誠の各氏から，いろいろと御教示および資料を頂きました。この場を借りて，厚く御礼を申しあげます。